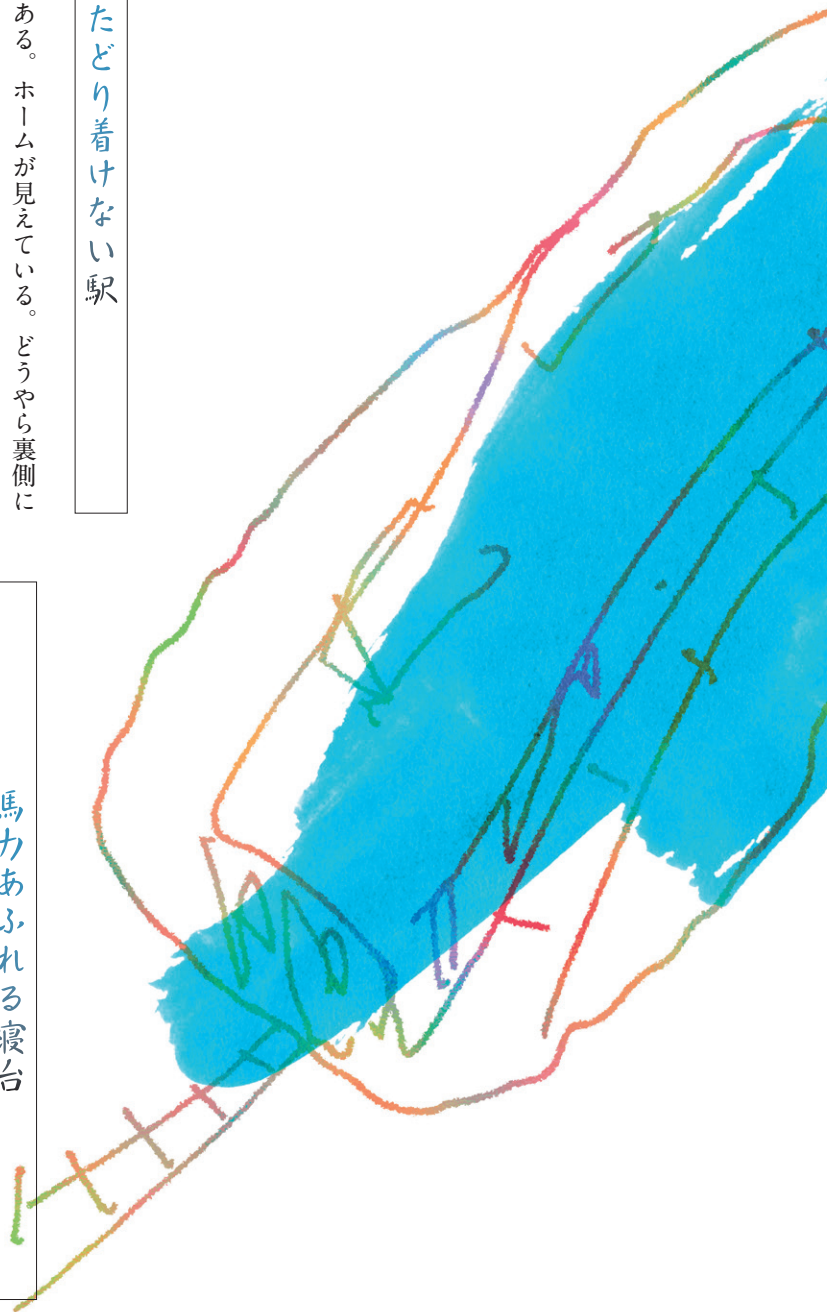


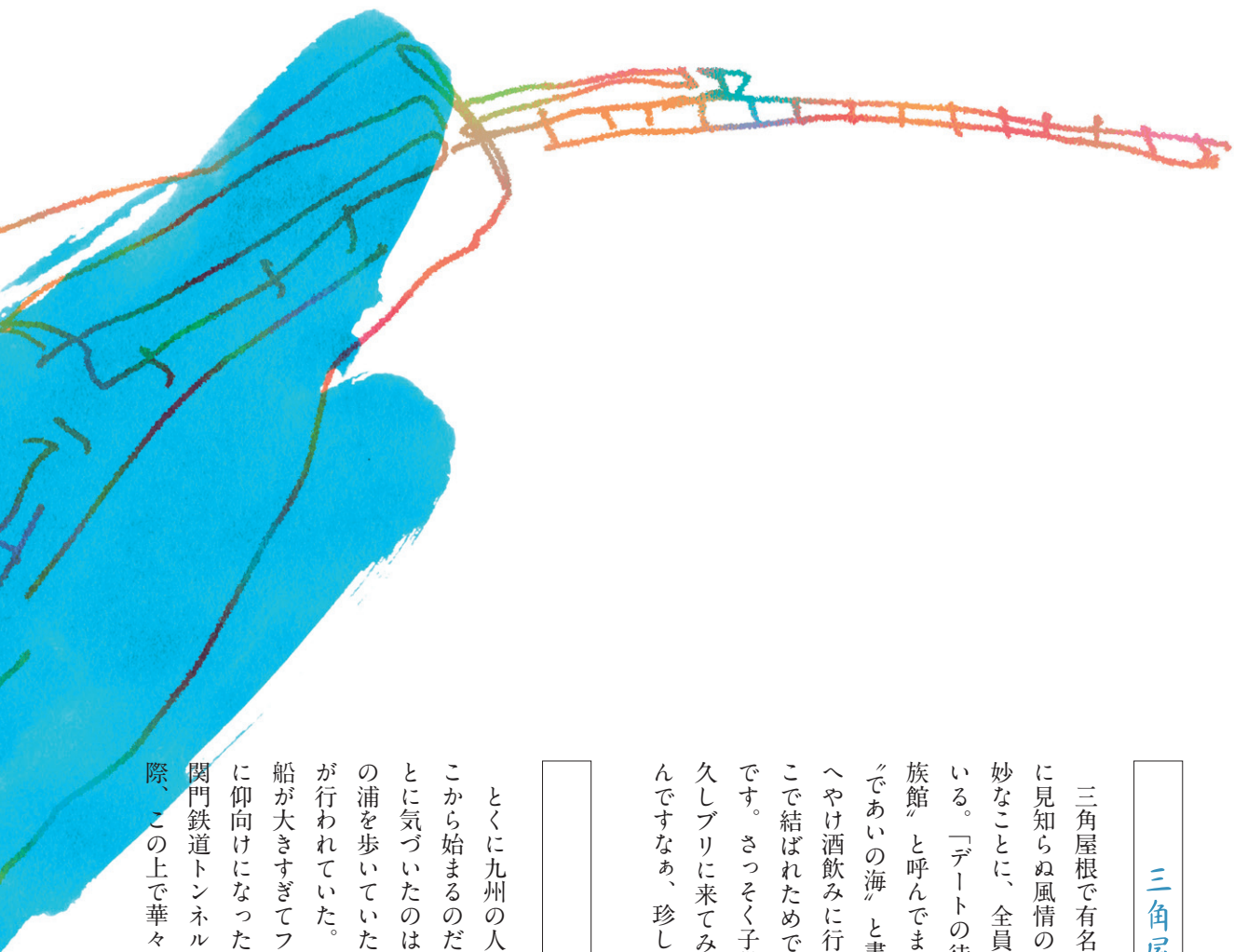
たどり着けない駅

駅はすぐそこにある。ホームが見えている。どうやら裏側に回ってしまったらしい。よほど大きな駅でなければ、出入り口がひとつしかないのは心得ている。まあぐるっと反対側に回れば、正面にたどり着けるだろう。ガードをくぐり、こっちだとも見通しをつけた道路に入っていく。なぜか目的の駅から離れてしまう。何度チャレンジしても、その繰り返しだ。まさか車で乗りつけて、列車に乗るわけでもなく、駅の雰囲気だけ観察しようという不心得を、鉄道の神様が赦さないのか？ ついに正面を諦めて、再び裏側へ。裏側で跨線橋への階段をのぼってみれば操車場やら工場やら、鉄道情緒が濃縮した幡生駅が、さっきからずーっと、そこにある。

馬力あふれる寝台

「富士」で東京に向かった。学生時代以来の寝台列車だ。こんなに揺れてたっけ？ 五十歳に達して体力が落ちたので、揺れが強く感じられるのかもしれない。じっと手のひらを見つめながら、飲むだけ飲むうち、眠りに落ちた。いつの間にか、乗る物が馬に変わっている。ガタンガタンがパカッパカッ。こいつは勢いがいい。列車より早く東京に着いたりして。おっと道草。真夜中の富士山を駆けあがり始めたかと思うと、あっという間に頂上を征服した。よく見るとこの馬、顔が人間だった。っていうか、体も人間だった。セクシヤルな後味の夢。





三角屋根の四角い待ち合わせ

三角屋根で有名な下関駅、ある昼下がりのコンコース。互いに見知らぬ風情の十数人の老若男女が、何ごとか語らっている。妙なことに、全員で取り囲んだ中のスペースが長方形になっている。「デートの待ち合わせはいつもここでしたよ」「駅の水族館」と呼んでました」「いや私は『まめすい』と」「看板には『であいの海』と書かれていたはず」「すっぱかされて、豊前田へやけ酒飲みに行ったりね」「アジのある待ち時間だった」「ここで結ばれためでタイ、カップルもいたようです」「自分らもです。さつそく子供というフクを授かりました」「それが僕です。久しブリに来てみたら水槽が消えていた」「もう一度見たいもんですなあ、珍しい駅の水族館を！」

上は船、下は列車

とくに九州の人は感じているに違いない。関門トンネルはどこから始まるのだろうか。それが彦島江の浦町あたりであることに気づいたのは、ひよんなきっかけからだ。たまたま江の浦を歩いていた時、三菱重工業下関造船所で大型船の進水式が行われていた。やじ馬根性で出かけ、写真を撮ろうとすると、船が大きすぎてフラインダーに納まりきらない。仕方なく地面に仰向けになったその瞬間、地中深くから震動が伝わってきた。関門鉄道トンネル！ それからの私は関門トンネルを通過する際、この上で華々しい進水式が行われていると思うことにした。